

ばと上の句をかきて出し給へるに、中將たいまつのみすみして、又あふさかの關はこえなんとな
の句をかきつぎ給ふぞおもしろきより羨けれ、うらやむもうすじほなり、人がらといひ情とい
ひ、及ばぬといふもおろかなれば、まつのおもはん事もはづかし、

月あかき尾花や風の手にいまつ

續松縛置歷何年 盜竊無興封境全 醫術純論治未病 用心正在不然前

炬火

〔倭名類聚抄十二燈火〕炬火

唐韻云、燭即略反炬火也、字書云、炬其呂反、上聲之重訓與

燈同、俗云、天阿加之、束薪灼之、

〔箋注倭名類聚抄四燈火〕

按其屬群母、牙音單行無輕重、此云重未詳、新撰字鏡、炬、止毛志火、雄略記火

炬、顯宗紀、燭火皆同訓、故此云訓與燈同也、中按、說文、苴束、葦燒、徐鉉曰、今俗別作炬、即此義、

〔俗義解五軍防〕

凡火。炬。乾葦作心、葦上用乾草節縛、縛處周廻插肥松明、謂松明是松之有脂者也並所須貯十具以上、

於舍下作架積著謂兼有烟貯、故云不得雨濕、

〔儀式七〕正月七日儀

乘輿還宮、日若逮昏、主殿寮秉燭、左右各廿炬、列立殿庭、左右衛門門部各秉燭、自萬秋延明兩門、分列

顯陽承歡兩堂前、其客徒賜祿畢退出、左右衛士各二人秉燭、迎儀鸞門、送朱雀門外、

〔延喜式五齋宮〕初齋院別當以下員

別當五位二人、一人命婦、中略、火炬小子二人、中略

新造炊殿忌火庭火祭中略

火炬二人、取同國山城葛野郡秦氏童女

右始自初齋院、至子參入太神宮奉仕、其齋王入伊勢齋宮、即各替却、

凡齋內親王月料及節料等皆准在京、其官人中略、火炬小女二人、別米一升、四合、鹽二勺、四撮、

〔延喜式四十六左右衛門〕凡黃昏之後、中略、其宮門皆令衛士炬火、閣門亦同